

スカベンジャーの実態調査報告書



桜美林大学 国際学部 国際学科
石井 丈士

2007年10月31日

目次

1 はじめに	2
2 調査報告	2
2-1 モンタルバンゴミ集積場	2
2-2 カシグラハン再定住地区	3
2-3 パヤタスゴミ集積場	4
2-4 ルパングパンガコ地区	6
3 おわりに	7
参考文献・資料・HP	8
付録	9

1 はじめに

赤ちゃんの顔には無数のハエが集り、足元一面に広がるゴミからは白い煙が上がり、近くの川では死体が流れ、集められているゴミはまったく分別されずに病院で切断された人の足まで混ざっていることもある。それが1995年までフィリピンの首都マニラに存在した「スモークーマウンテン¹」と呼ばれていたゴミ集積場²である。多くの人々がそんなゴミ集積場の中で必死にゴミ拾いをし、再生可能なゴミを拾い集め、売りそのお金で日々暮らしていたのである。そんな風にゴミを拾い集め生活している人たちを「スカベンジャー」と言う。

フィリピンでは多くの人がスラム³住人として生活し、フォーマルな仕事に就くこともできず、劣悪な生活環境の中で、その日暮らしの生活を送っている。今後、人口増加と都市の経済発展によってさらに悪化するであろう都市の貧困問題。その問題へのアプローチの第一歩として、フィリピンの都市貧困問題の象徴とも言えるスカベンジャーの調査を行った。

2 調査報告

2-1 モンタルバンゴミ集積場

・ 調査方法

現地で活動する日本のNPO法人SALTパヤタスファンデーション（以後SALT）のスタディツアーに参加し、ゴミ集積場を視察した。

・ 調査地

マニラの隣に位置するリサール州サンイシドロ地区モンタルバンにあるゴミ集積場。広さは約14ヘクタール。現在1日約1700トンものゴミが運び込まれている。

SALTのスタッフによると、パヤタスのゴミ集積場は2007年中に閉鎖するという計画があり、パヤタス閉鎖後にはより一層多くのゴミがここに運び込まれることになるかもしれないそうだ。このゴミ集積場では約2070人ものスカベンジャーが働いている。この周りは住居の集りなどもなく豊かな自然に囲まれた場所であった。ゴミ集積場はその自然を切り拓いて設置されていた。自然が豊かであるため、逆にこれからまだまだ自然を切り拓きゴミ集積場として拡大の可能性を持つ場所であった。

・ 考察

働いていたスカベンジャーたちはみなIDを持ち、行政から支給されたユニフォームを着ていた。ここで働くには行政に登録する必要があるそうだ。また、ゴミを捨てるときの工夫として、捨てる場所には、土壌や水質の汚染を防ぐために黒いビニールを敷き、その上にゴミを捨てていた。ゴミが溜まるとそこに土を被せ、ゴミの分解を促進するため草を植えているそうだ。その

¹ 山のように集められたごみが太陽の熱を受けて自然発火し、煙を出している姿からそう呼ばれた。

² フィリピンでは「dump site」と呼ばれて、日本語に訳すと「ゴミ処理場」などとも訳せるが、ゴミを処理しているというよりは、ただ集めているだけであるように思える。そういった思いも込めて「ゴミ集積場」と本文では表記する。

³ スラムとは「密集化し、老廃化し、不衛生化し、あるいは必要公共施設やアメニティの欠如などの問題をかかえた、一戸の建物、建物群、又は地域であり、またこうした環境のゆえに当該地域の住民やコミュニティの健康、安全、道徳等がおびやかされているところ」という国連の定義に基づく。

程度の処理で土壌の悪化が防げるかどうかは疑問であったが、働くために ID やユニフォームを必要とするなど、ある程度の行政の対策の片鱗は見る事ができた。



左（写真1）モンタルバンのゴミ集積場
手前に見えるのが溜められたゴミに土を被せ整備された状態。左手奥に現在ゴミを集積している。
周囲は緑の山に囲まれている。

右（写真2）ゴミを拾い集めるスカベンジャーたち
青い色のユニフォームを着ているのがわかる。



左（写真3）地面にビニールを被せここにゴミを集積するそうだ。

2-2 カシグラハン再定住地区

・ 調査方法

ここでは SALT が実施した SALT 奨学生の調査に同行させてもらった。そのため、全てのインタビュー対象者（親）の子どもが SALT の奨学生であった。

・ 調査地について

リサル州サンホセ地区に位置する。パヤタスで 2000 年に起こったゴミ集積場の倒壊事故により被害を受けた家族の再定住地であるとともに、マニラ首都圏内の都市貧困地区から立ち退きさせられた多くの家族が移り住んで来た、再定住地。

この地域の住居は政府によって建てられたコンクリートの家であり、水道、電気が各家庭にひかれている。ただし移転の際、土地は政府からもらい受けているが、政府から住むように割り当てられた家は月々 250 ペソ払いで 5 年間払う形で購入している。

- ・ 考察

この地域は一見するとコンクリートで建てられた家々が綺麗に整備され並んでいて、貧困というものは見えてこない。マニラにある都市スラムと比較すると、生活環境は良いのかもしれない。しかし、実際にインタビューに答えてくれた住人は口を揃えて「以前の生活の方が良かった。」と言う。なぜなら、強制移転などにより以前働いていたマニラから離れたため、以前までやっていた仕事は当然続けることができず、新しい仕事を探さなければならないからである。

都市から離れたこのコミュニティではマニラと比べると仕事の数は少ない。コミュニティ内での仕事を得られたとしても、マニラでの仕事と比較するとやはり収入は少なくなることが多い。一方でコミュニティを出て住み込みの建設労働をしている人もいたが、仕事先での、生活費、また家に帰るときの交通費などのために収入の一部を費やさなければならないことは彼らにとって非常に重い足かせとなっているようであった。それに加え、家のローンも払わなければならない、生活は非常に苦しいと住人たちは語っていた。

この再定住地区は、政府のスラムへの対策（移転）が何の解決ももたらさないことを象徴していた。政府の対策は住民の生活を無視していることは確かであり、スラムへの対策がいかに不適切であることがわかった。



(写真4) カシグラハン再定住地区の様子と子どもたち

2-3 パヤタスゴミ集積場

- ・ 調査方法

この集積場を統治している POG(Payatas Operation Group)⁴からゴミ集積場の概要や、集積場内でのプロジェクトの説明を受け、ゴミ集積場に入り視察を行った。

- ・ 調査地について

メトロマニラ北東部ケソンシティのパヤタスにあるゴミ集積場。マニラの中心部からバスと

⁴ 2000年7月の倒壊事故を受けて行政により設立された組織。